



「ポーランド・ドイツの3大学で講演を終えて」

大阪大学大学院工学研究科・助教

A01 植竹 裕太

uetake@chem.eng.osaka-u.ac.jp

この度、第1回「グリーン触媒科学」Green Catalysis Lectureship Award を受賞し、ポーランド・ドイツの3大学にて講演してまいりました。筆者は博士学位取得後すぐに日本の研究機関で職を得たため海外留学を経験しておらず、元来出無精の筆者も「そもそも海外に打って出ないといけないなあ」と逡巡していた矢先、このような機会を頂けたことは大変ありがたい

ことでした。とはいっても国外研究者とのコネクションもありませんので、訪問先の選定にも逡巡したわけですが、幸い現所属（阪大 櫻井研）では各国から留学生を積極的に受け入れており、ポーランドとドイツで研究を続けているOBがいることから、これを頼りに受け入れ大学を選定しました。日程調整をしてみると4日で3拠点を訪問する弾丸日程となってしまい（さらに、この時期は夏季休暇中と後に知る）、初訪問のポーランドとドイツでゆっくり講演旅行を楽しむという申請時の目論見は脆くも崩れ去った。

最初の訪問先はポーランドのワルシャワ工科大学で、所属研究室に在籍していたArtur Kasprzak准教授にホストになってもらいました。9月8日の早朝7時にワルシャワ国際空港に到着し、ホテルのチェックインまでかなり時間があったことから、迎えに来てくれた学生にワルシャワ市内を案内してもらいました。X線分光を扱う筆者としてはマリ・キュリーの生家を訪れてみたかったのだが、生憎その日は休館日で中に入ることはできなかった。次の日（9月9日）はワルシャワ工科大を訪問。Artur准教授との再開を喜び、所属学生とディスカッションの後、最初の講演を行った。「有機化学におけるX線吸収分光法」という学際系な内容ということもありますし、日本の有機化学コミュニティで講演しても質問が少ないことが多いのですが、ここでは複数質問をいただくことができ、無事終えられたことにほっとした。ちなみにポーランドは欧州の中でもかなりの親日国であり、第一次世界大戦時にポーランド人シベリア孤児を日本政府・日本赤十字社が救済したことをきっかけに今日でも友好関係が続いている。そういう経緯もあり、日本からの訪問とのことで夏季休暇中にも関わらず多くの研究者が講演に訪れてくれたこ





とは感謝の念に堪えない。その後軽食を摂ってから、ワルシャワ中央駅から次の訪問先であるヴロツワフへと電車で4時間かけて移動した。ホテルに到着した頃には夜10時を過ぎていたが、ヴロツワフのドワーフが迎え入れてくれた。

9月10日はArtur准教授の紹介で友人のKarolina Hurej博士を紹介していただき、ヴロツワフ大学で講演を行った。その日の朝、宿泊先で朝食を摂っていたら、ロシアのドローンが前日まで滞在していたワルシャワ近郊に領空侵犯し、ワルシャワ国際空港が一時閉鎖されたとの報あり。訪問日程次第では到着できなかつたかもしれないと思うと肝が冷える思いである。朝一で講演を行い、「これはケイ素にも使えるのか?困っているのだけど」といった具体的な質問があり、非常に有意義な時間を過ごすことができた。続いて学科の教授やスタッフ7人と続けざまにディスカッションを行った。講演時に筆者の紹介をしていただいたEwa Dudziak教授とはメタロポルフィリンの金属-金属間結合について議論し、ポーランドのポルフィリンの父と呼ばれるPiotr Chmielewski教授には分光分析を駆使したポルフィリンの動的挙動の解析やノルコロールの化学について紹介いただいた。その後、Mateusz Janeta博士とディスカッションしていた時に彼のメンターであるSławomir Szafert教授にお声がけいただき、少し前まで京都大学に滞在していたことに加え、共同研究の提案を受けるなど実りある一日となつた。その後、Ewa教授やPiotr教授らとヴロツワフの美しい街で夕食を共にした。その際に、「あなたの発表は基礎から話してくれるの非常にクリアだった」と言っていただき、これは大変励みになった。また、参加したポスドクの一人は「この前京都の国際会議に参加していた。日本で研究したい。」と話しており、ここでも日本とポーランドの関係の良さを感じることになった。

翌日は移動日で、ヴロツワフ空港からフランクフルト空港で乗り継ぎ、デュッセルドルフへと向かった。ここでは、飛行機の遅延により乗り継ぎに失敗、急遽便を変更したがその便も遅延、デュッセルドルフに着いたは良いものの荷物が出てこない(結局1時間待って出てきた)などのトラブルに見舞われ、ホテルに到着したのは深夜になってしまった。

9月12日、旧交のあるBernd博士とホテルで落ち合い、ハインリッヒ・ハイネ大学





を訪問した。互いの近況について情報交換した後、彼の研究室で行っている超分子化学に関する研究紹介とディスカッションを行った。学生は非常にアクティブかつ快活で、互いの研究成果を「Super interesting!」と言い合っているのは印象的であった。驚いたことに、学生の一人は筆者の共同研究先（京大）に少し前まで短期留学しており、図らずも縁で繋がっていることを感じさせられた。講演終了後、いくつかの質問を受けた後、無機化学を専門とするJaniak教授の部屋に招かれ、ここでも共同研究の可能性について打診された。その際に、早稲田大学（私の母校）にポスドクに行くという学生と面談してくれないかとの申し出があったので、「良いところだ」と伝えておいた。正直ここでの講演はあまりうまくいなかったなど反省していたのだが、Berndからは「え、なんで？全然良かったけど。」との評だったのでなんとかなっていたようである。その後の夕食ではドイツ最古のブリュワリーに連れて行っていただき、アルトビールを飲みつつ、ドイツでしか食べられないメット（生の豚挽肉）に舌鼓を打った。ドイツでは「わんこ蕎麦形式」でビールがサーブされる仕組みになっており、能動的な制御が求められるこのシステムは筆者にとっては非常に危険だと感じつつ、全行程を無事に終えることができたことを喜んだ。

若手研究者にとって研究成果を国外でまとまった時間発表するのはなかなかに得難い機会であり、大変良い経験をさせていただいた。また今回のツアー中に2度「Are you free for a collaboration?」と言っていただいたことは大きな自信につながった。今後もこうしてできた国際的なつながりを広げつつ、分野の発展への貢献や自身の研究の研鑽を継続していきたい。

最後に、金井求先生をはじめとする国際活動支援担当の先生方、諸々の手続きで大変お世話になりました大井研秘書の深尾さま、野田さまには厚く御礼申し上げます。グリーン触媒科学で行なっている研究とは少し異なる内容で採択いただいたことには、感謝の念に堪えません。

